

廢名『莫須有先生伝』訳稿（五）

Fei Ming's Moxuyouxiansheng zhuan：A Transportation（5）

張 雪晶*・山田 史生**

Xuejing ZHANG*・Fumio YAMADA**

要 旨

廢名（1901～1967）の前衛的小説「莫須有先生伝」の翻訳。『廢名集』第2巻（北京大学出版社）所収に拠る。

キーワード：廢名 莫須有先生

第十二章 月はもうのぼっている

月はとうにのぼっていた。

山のなかでの一日は、世間における幾千年にもあたるんじゃないかな？ だからどうなのかっていうと、われわれの地球というのほうごいていなくて、しずまにかえっているんじゃないかな？

「家主の奥さん、吾輩はしゃべりたくてしょうがない——なんだ返事もしてくれないのかい？ 居眠りでもしているのかい？ だったらしょうがないか」

だったらしょうがないか。月のうつくしい晩だ。地べたにうつる木の影がうつくしい。木のこずえをわたってゆく風の音もうつくしい。北国の秋はずばらしい。吾輩の家主の奥さんはまるでネコみたい、真っ黒けのかたまりで、とはいえひとりの人間がひとつの影であるというわけでもなく、さもなければ地球にはまったく意義はないわけで、吾輩もこんな冷たい石にすわって月をながめたりするだろうか？ 吾輩のみるころあなたは一日中はたらきづめで疲れきっているから、お日さまがしずむころにはいつもうつらうつらと居眠りしているけれども、ひとつアクビをして目をさましてみれば腹のなかにはしゃべりたいことがいっぱいたまっており、いったい人間はどうしてこんなにもおしゃべりが好きなんだろう？ あなたが返事してくれないもんだから、吾輩はすこしガッカリして、こうなったら運動でもするしかしょうがあるまいとおもい、起ちあがって舞いおどって清い光に影をみいだしてみるならば、とても人間の世界にあるとはおもえ

ず¹、一！ 二！ 三！ この曲芸はおもしろくもなんともなくて、これなら高い山をふりあおぎ²山のいただきをのぞみみるほうがよほどマシで³、ほら、吾輩はいままさにながめているのだが、なんにもみえてはいないのであって、じっさい高い山や険しい林がそこにはあって、その奥まったところには木こりが住んでいるちいさくて白い寺院があり、白い馬の白、白い雪の白、そもそも山のいただきというのは、西山の最高峰のことであって、ああ、いったいだれが吾輩の抱負を知っているであろうか、月のしたでなければ花のまえに⁴五岳は方寸に起こり⁵。……

「莫須有先生、あんた寒くないの？ 寒いなら部屋のなかにおはいいいなさいな」

「あなたがそういうならそうするけど、もし吾輩ひとりっきりだったら、もちろん吾輩のしたいようにするよね」

「そんなところに突っ立ってひとりで返事しちゃったりしてなにをしているんだい？」

「さっきまで自分ひとりの想像の世界にひたっていたんだけど、真っ暗い夜のなかに太陽や月がのぼってきて、ありとあらゆるものななかでただ花だけが灯りな

- 1 起ちて舞い 清影を弄すれば 何ぞ似ん 人間に在るに（起舞弄清影 何似在人間）蘇軾「水調歌頭」
- 2 高山は仰ぎ 景行は行く（高山仰止 景行行止）『詩経』小雅「車輦」
- 3 鬼見愁は「草名。出武当山。或採令童子佩之、或懸於門首、云可以避鬼魅」（『辞源』第三版）だが、この場合は山頂をいうと解する。
- 4 昼は笙歌を聴き夜は醉眠す 若し月下に非ずんば即ち花前（昼聴笙歌夜醉眠 若非月下即花前）白居易「老病」
- 5 五岳 方寸に起こり 隠然 詎んぞ平らかにす可けんや（五岳起方寸 隠然詎可平）李白「望鸚鵡洲懷祢衡」

* 陸奥新報社

** 弘前大学教育学部国語教育講座

のだよ。言葉をかかずといえ、家主の奥さんと面とむかっておしゃべりをして、夜にはというと、ふたりともおのれの影をみてすっかり陶酔して——あなたは起きていますか？ 今日はどういう日だったけ？ 奇妙なことに、どういわけか吾輩はなにもかも忘れてしまったみたいで、まさか今日になってもまだこんな幻滅に見舞われることになるうとはおもいもしなかったけど、まるで幾日もつづげさまに悩みごとにとりつかれ、どんなに言葉をついやしても語りきれないほどで、文章だったらここにいたら絶筆するところだろうけど、いきなり黄石公⁶が大仏寺から幾巻かの書物をもってきたかとおもえば、昼から夜中まで、大海原でたむむれて、このうえなき真実にして完全なる悟り⁷、みずから焼香し、みずから礼拝したかとおもうと、すぐさま身をひるがえしてあなたとおしゃべりをするわけで、それというのも『莫須有先生伝』をかくひとがなにかの結末をつけるためであって、なんというか、つらつら前途をおもみみるに、まさか四万八千巻をかくなんてことになったりして、まあそんなことはやってらんないんだけど、そもそもひとつのことをやるからには恥ずかしくないくらいちゃんとやりとげるのが当たりまえであって、冗談がきいてるかどうかなんていうことはまったくどうでもよいことであって、ちゃんとやらないと吾輩はあなたを叱りつけることになるけれども、あなたはまったくもってダメなひとで、まったくもってなんにもわかっていなくて、だからかわいそうなひとなんていうふうによばれるんだよ！ あと何日かすると吾輩の誕生日なんだけど、今年の誕生日はこれまでの誕生日とはまるでちがっていて、ひとの一生には記念すべき一日というものがあるのであって、だから吾輩はここに突如として日記をつけることをおもいついたんだよ

「あら、それって何日なの？ 教えてくれたら、あんたのために誕生祝いをしてあげるけど——ついこないだお巡りさんがやってきて歳をたずねたとき、あんたはどういうわけかおぼえていなくて、うまいこと返事をしといてくれていったわよね？ だから莫須有先

生は三十歳だっっていつといたんだけど」

「たいへんよろしい、その日がきたら吾輩は町のほうにゆくつもりであって、ついでに友だちをたずねてみようとおもっていて、ずいぶん久しく不沙汰をしているからね。そのときあなたになにかお土産を買ってきてあげるよ」

「いらないよ、だっってあたしらは身内なんだし、そんなものはいらなくて、これからずっとながつきあうんだし、あんたにはお金がないってことはよくわかっているから、もしこれからさき莫須有先生が金持ちになることがあつたりしたら、ひょっとすると莫須有先生もいくらか散財してくれるんじゃないかしら？ あたしたち夫婦は、ふたりっきりで身寄りもないから、七十八十まで生きたりしたらどうなっちゃうんだろう？ そのときになってどうしようもなくなつたら、そのときは莫須有先生なんかひとつ面倒をみてちょうだいな」

おしゃべりはまだつづいていたが、莫須有先生はすっかり考えこんでしまい、うなだれたまま頭をあげられない。金持ちになるといっても、莫須有先生が金持ちになるかならないか、むろんなにがどうなるかはわかったもんじゃないとはいえ、もし金持ちにならなかつたらどうするんだろう？ まったくもって本音がむきだしなんだから！ さっさとしゃべってくれてよかったよ！ 莫須有先生としてもやってらんないよね！ いったい自分の父親と母親とのことはどうすりゃいいっていうのさ！ なんでも老いたものと幼いものをやしなってくれるところがいろいろ散らばっているらしいときいたことはある。まさに桃源郷みたいなところのようだけど、どうやらそれって飢えや寒さにさいなまれる洞窟みたいなところなんですよ？ だとしたらちっとも楽しくなさそうだし、ものすごく退屈にちがいない。まあどうでもよいことであって、どっちみち吾輩にはかかわりがないことだし、だからホラを吹かせてもらえば、明日から吾輩は大志をいだし、しっかり修行にはげみ、衆生をあまねく済度して、そのことを成就するまではあきらめないと誓うことにするが、そのためにも吾輩はためしに粗食にたえることからはじめることにしてみよう。そうすると決めた。じゃあまずは返事をしなけりやなるまい。

「家主の奥さん、吾輩は誕生日のまえの日にならざる車にのって町にゆくのだよ」

「いっちゃダメだったら、うちでおとなしくしていたら、あんたは大根が好きなんだから、大根二斤と羊の肉一斤とを買ってきて煮込んであげるからさ。あたし

6 秦時隠士。相伝張良刺秦始皇不中、逃匿下邳、於圯上遇老人、授以太公兵法、曰、読此則為王者師矣。後十年興。十三年孺子見我濟北、穀城山下黃石即我矣。後十三年、張良從漢高祖過濟北、果見穀城山下黃石、取而祠之。世稱此圯上老人為黃石公。參閱史記留侯世家(『辞源』第三版)

7 阿耨多羅三藐三菩提は「仏智の名。旧訳、無上正徧知。無上正徧道。真正に徧く一切の真理を知る無上の智慧のこと」(織田得能『仏教大辞典』)

のおごりだから、なにも気にしなくたっていいのよ、お金ならあるんだからさ」

「いや、吾輩はどうしても町にゆかねばならぬのであって、だから吾輩はあなたのつくったものは食べられない。来月から吾輩はなんとか家賃がとどこおらぬようにするけれども、もしあなたが本心を隠して、あわてて無理してはらわなくてもいいよ、莫須有先生の好きなようにしてちょうだいなんていったりしたら、そうなったらもう三十六計逃げるに如かず、もし吾輩をさがすひとがいたら、吾輩のことは乾物屋の店先をさがすようにいっておくれ⁸」

「おやまあ、なんでそんなことをいったりするの？ どういうつもり？ あたしにはそんな気はちっともないのに、あたしみたいな貧乏人があんなのことを気にかけるのが信じられないっていいたいわけ？ 貧乏人がひとに親切にするなんてできっこないともいうの？ 俗にいうじゃない、『おなじ船にのって川をわたるのは、五百年もの修行のおかげだ』って、ひとりっきりであれこれ悩んでもろくなことはないのよあって、どうせなるようにしかならないのよ」

「その一言はこころにグサッとささるよ、まるでワシの羽根でやられたみたいに、ははは、ははは」

「なに子どもみたいなことをいってんの！」

「吾輩はあなたのことを完全にわかっていて、吾輩はあなたのことを完全にわかっていて、吾輩はあなたのことをとうのむかしから完全にわかっていて」

「だったらあなたはまだ町にゆくって言うのかい？」

「じゃあおとなしく家にいるよ」

「そう、うちにいなさい」

「うん、うちにいよう、だって町にゆくと吾輩はおそらく金をムダづかいするからね。それにきつと時間のムダづかいにもなるだろうし、この一ヶ月というものやるべきことはまったく予定どおりにやれてなくて、せいぜい四分の一しかやれてなくて、じつはこの一ヶ月だけじゃなくて、はじめからずっとそうだったんだけど、まったく最悪だよ。でかけない？

精神的にはとうに動揺しているから、明日にはなんにもできないだろう。でかけていたら、二日ほど遊べるのに、かわいそうに、おとなしくしているしかないのかな。でかけない！ そうとも、『でかけるのをやめ、もどって坐って考えてみる⁹』』といていたように、むかしのひとも吾輩といっしょなのだ。もっとも吾輩のやるべきことなんて取るに足りないことばかりであって、まったく気に病むにもあたらないことばかりなんだけど、とはいえ天下の一大事っていうのはな

にかといえ、正直にいうと、ありとあらゆる大問題をすべて莫須有先生はもう解決してしまったのであって、まだ足りないものがあるとすれば日常におけるどうでもよいことだけなわけで、たとえば朝早くに起きたとき、今日は掃除をしようかしないでおうか、もし掃除をするとすれば、なんだか頭のほうはその気にならないようだし、さりとて掃除をしないと目のほうが汚れを気にするみたいであり、じっさい汚れてなんかいないわけなんだけど、まあ気持の問題でしかない。うん、吾輩はやっぱりでかけないことにするけど、ひょっとして堂々とでかけたとしても、あなたもでかけなかったというだろうし、そうでないと一ヶ月もたっていないのに光景は、町から田舎へ、田舎から町へ、たしかな歴史はいつまでたっても完結する日があることはなく、ちがう題目にさせてあげるほうがよくなって、そうはおもわない？ 吾輩はひとつ詩をよんであげよう

薬を売ったり琴を修理したりして帰るのが遅くなった山ではモクセイの花も風に散ってしまったことだろう
俗界における歳月のながれはまたたくまにすぎゆくよ
仙人にあっても碁を打って時のたつのを忘れなさんな¹⁰

ああ、あなたと吾輩とのどっちの頭のうえにも月がのぼっていることを忘れていたが、なんとも月というのはさびしくて、人生というものは時をうつさずに楽しむべきなのであって、こんなふうにいっているそばから時はすぎてゆくわけで、ほらご覧なさい、吾輩はこうしてヒザをかかえて、頭をあげて月をあおいでいると、こころのなかにひとつの心配事がいきなり猛然として浮かんできて、それはもうはるかに遠いむかしのことなんだけど、かれこれ十数年もまえのことになるうか、いったいひとの記憶というのはヘンテコなもので、まったくもって運命にくらべてももっと見当のつかないものなのであって、まったくなんの理由もないのにどうして吾輩にこんなふうにくも苦くもありまた

8 枯魚は「乾魚。莊子外物、「吾得斗升之水然活耳、君乃言此、曾不如早索我於枯魚之肆！」後常用枯魚來比喩处境困窮者」（『辭源』第三版）

9 行く行く門を出づるを停め 還り坐して更に自ら思う（行行停出門 還坐更自思）陶淵明「擬古九首」其六

10 薬を売り琴を修め帰り去ること遅し 山風吹き尽くす桂花の枝 世間の甲子須臾の事 仙人に逢着せるも碁を看ること莫かれ（売薬修琴帰去遅 山風吹尽桂花枝 世間甲子須臾事 逢著仙人莫看碁）許渾「送宋処士帰山」

甘くもあることを味わわせるのかね？」

莫須有先生は月をみあげて天にむかって問いかけたかとおもうと、ものおもいにしずんだまま黙りこんでしまい、ヒジ枕で眠るようにして¹¹、その寝そべっているところは冷たい石のうえで、その冷たいところに趣があるわけで、家主の奥さんはというちいさな腰かけにすわっており、いまのところ元気ハツラツといった感じで、まさに夜を徹しておしゃべりすることも辞せずといった勢いで、腰が痛いのも気にならぬというふうであり、起ちあがろうにも起ちあがれぬようであったが、いざ起ちあがってみれば、その身の丈はおもいのほか高く、莫須有先生はその意外さにおどろいたのだけれども家主の奥さんは部屋のほうにゆき、部屋にはいったかとおもうと¹²、またあらわれてきて、どうやら敷きものをとりにいったらしく、ところがその敷きものときたらもともと赤ん坊のおしめとして使っていたものであって、そのまま莫須有先生のかたわらにたたずんでいるので、莫須有先生はひどくビビってしまい、おもわず身ぶるいすると、家主の奥さんはいう

「ほら起って」

莫須有先生はまったく無意識のころのはたらきによって、たちどころに起ちあがり、そしてまた寝そべったのだが、なんでつづるに値しないことをつづっているのかというと、それはもうハッキリしていて、それを敷くことで冷たくななくなったということなのである。それから家主の奥さんはまたちいさな腰かけにすわり、おしゃべりのつづきをしようという顔をするので、莫須有先生は口をひらいていう

「あこのころ吾輩はこころもからだも病におかされていて、からだの病はホントだけど、こころのほうは冗談だとして、とにかく孤独をかこちながら寺院のなかに住んでいて、寺院での暮らしはおだやかで¹³、和尚はもともと米をつくことをなりわいとしていたが、すごく修行にはげんだひとらしく、野菜のなかでもモヤシが好きで、吾輩の部屋は仏堂のまえ、和尚の部屋は仏堂のうしろ、だから菩薩は和尚よりも吾輩のほうの面倒をみてくれたようで、夜がふけてひとが寝静まるころおい、吾輩は真つ暗な仏堂のなかの菩薩の常夜灯が鬼火のように燃えているのをながめるのが好きで、たしかに幽霊はおそろしいけれども、それだったら蚊もまたおそろしく、ころは夏、吾輩は例によって灯りもつけずに仏堂で静かにすわっていた。この寺院もまた孤立した建てものであって、窓の外はどこまでも曠野がひろがっており、その曠野のきわまったところに

古い町があり、その古い町のむこうにはまた曠野がひろがっていて、荒れはてた無縁墓ばかりが累々とかさなりあっている。月夜の草の露は、その一滴一滴にはみな靈魂がやどっており、みつめるほどに涙目でもって吾輩のほうをいっせいにみつめかえしてきて、首をつって死んだものの幽霊につかまると首をしめられるというから、あわてて頭をもたげたけれども、こんなにもよい時節のうつくしい景色をながめないではおれないので窓から十分間くらいながめてから眠りにつく。いやもう、一生のうちでも悔やまれることにここででくわすとはなあ

「つづけてしゃべってくれればいいのに、どうしてそんなふうにしんぼりうなだれているの？」

「ある日の夜のこと、ちょうどお盆のころということもあって、通りは夜警のための太鼓の音が鳴りひびき、宮城の門もひらかれ、北郎山のうえでは餓鬼が口から炎をふきだしており、街をとりかこむ河には灯籠がながされ、吾輩のいるところはすっかり寂寥感につつまれ、炊事係の和尚さんもとうにイビキをかいていて、なにひとつさえぎるものもない月の光は、吾輩の憔悴した顔を照らしたすので、今宵はかならず窓をしめきっておかねばならず、おぼつかない手足をうごかして、物音ひとつたえず静かに、悠々自適というふうに、吾輩が窓をしめると、いったいなんでまたこんなところにやってきたの¹⁴、そう女の子の声がして、ふう、これは人間のたてる音で、生まれてこのかた吾輩はふたりの若い女のひとの声にとらわれており、それは偉大なる靈魂が従順なる子羊へと調教されるようなものであり、たとい耳がなくても静寂のうちにあらゆる音がきこえてきて、人間のたてる音はじつは自然のたてる音なのであって、だからその音はあなたのことなど気にもとめないわけで、ひとつたずねるけど、吾輩はなにゆえに小窓から風がふきこんできて琴にふれて音を鳴らすかのように哀しい調べをかなでるのだ

11 子曰く、疏食を飯らい、水を飲み、肱を曲げて之を枕とす。楽しみ亦た其の中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我れに於いて浮雲の如し（子曰、飯疏食飲水、曲肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲）『論語』述而

12 子曰く、由や堂に升れり。未だ室に入らざるなり（子曰、由也升堂矣。未入於室也）『論語』先進

13 女は曰う雞鳴 士は曰う昧旦 子興きて夜を視よ 明星は有にも爛けし 將た翺し將た翔し 鳧と雁とを弋ん（女曰雞鳴 士曰昧旦 子興視夜 明星有爛 將翺將翔 弋鳧與雁）『詩經』鄭風

14 嗟 爾 遠道の人 胡為れぞ来たれるや（嗟爾遠道之人胡為乎來哉）李白「蜀道難」

ろう？¹⁵」

「やたらとむつかしい言葉をならべちゃって¹⁶、いったいながいたいわけ？ ひとりの女の子が真夜中だっているのにあんたのいるお寺にやってきたんでしょ？」

「ふたたび耳をすませてみると、それは吾輩にはもともと耳なれた声であって、吾輩はすぐにハッキリとわかった。それにしても恨めしいことに人間の世界にはなんでまた月夜なんてものがあるのだろう？ 夜というのは盲人の国のものであるべきで、それは吾輩にまったく光をみえなくさせる。吾輩はけっして嫉妬しているのではなく、こころを傷めているのであって、視界がひらけたかとおもうと吾輩はもう月のしたの吾輩の魚のお姉さんのうしろすがたをみずにはおれなくなって、ぬりつぶそうにも消すこともかなわず、さいわいなことに恋人がいるのかどうか吾輩はもちろんわかっていなくて、吾輩の知りあいの男のなかにそれらしいものはみあたらず、しょせん愉快な化身とでもしておくよりない。魚のお姉さん、どうか吾輩があなたを責めるのを責めないでほしいのだが、だってあなたはあなたのかawaiiそうなちっちゃい弟のことをちっともおもい浮かべもしなかったわけで、いまになって莫須有先生をそんなふうによんでみても、まさかあなたはこれがかれの窓のまえだってことを知らないというんじゃないかな？ いままさにこの冷えきった寺院のなかにかれがいるってことを？」

「あたしは完全にわかっちゃったんだけど、その娘っ子はとんでもない子であって、あんたたち江南の風俗はちがうのかもしれないけど、あたしたちのこの土地では、そんなことはありえないわよ！」

「耳ざわりな言葉ではげましてくるのは、ただ憂いをつのらせるばかりだっているのに、そんなことをいってどうしようというの？ あなたは吾輩の身になって考えてくれないかなあ、魚のお姉さんは吾輩にとってどういうひとなのだろう？ あのひとの本名はそもそもどんな数文字をかくの？ この一文字はただほめかしているだけにすぎないんだよ！ あのひとは素敵な娘さんで、あのひとみたいに聡明なひとはどこにもなくて、しょっちゅう吾輩のお婆さんのうちに遊びにくるから、れわれはしょっちゅういっしょにいるわけで、あのひとはいつも吾輩のことをからかうもんだから吾輩はとでも恥ずかしくて、あのひとは吾輩が困っているのを見て笑い、それを楽しんでいるんだけど、そのあとですぐにしょんぼりして、それはもうさびしうにうちしおれて、ものすごく吾輩のことを愛

しているというふうな眼でもって吾輩のことをチラッとみたくとおもうと、いきなりクルリとむきをかえて他人のおしゃべりに割りこんでゆくのか。あのひとは吾輩よりも本をたくさん読んでいて、吾輩よりも見識が高いから、いつだって吾輩のために有益な意見をのべてくれて、吾輩はあのひとに遠くおよばないことを恥ずかしくおもっていた。だから吾輩はどうしてもいえなくて、『魚のお姉さん、吾輩はあなたのことを愛して——』でもねえ、魚のお姉さん、この男はどうしてこんなにおバカさんで、ところが、あなたはいうのだよ、そのバカなところがいちばん愛すべきところなわけで、あなたにはわざとお姉さんのふりをしないでほしくて、みんなといっしょに吾輩のことをからかって笑うはやめておくれよ！」

「どうやらその娘さんはものすごくおっとりしているみたいだね」

「あの晩の吾輩がどうやって窓のまえからむきをかえたものやら、吾輩はまったくおぼえがない。それからというもの、吾輩がお婆さんの家をおとずれて、魚のお姉さんにあうたびに、魚のお姉さんはいつもきっと吾輩にたずねてくる、『莫須有先生——』あのころの吾輩は、いまの吾輩とはちがっていて、いまでも相変わらずむかしのままだったりしたらそれはまずいよね。『莫須有先生、あなたがこころのなかにどんな悲しみをかかえているのかわからないけれども、からだは大丈夫なの？ どんなことでもよいからあたしたちにいってこないかしら？』吾輩はそのつどはぐらかし、この世でなにが恥ずかしいってあのひとのまえで一言もしゃべれずに涙をこぼすことだよ。ながい歳月がながれて、吾輩はふるさとをはなれ、東から西へはたまた南から北へとさまよい、魚のお姉さんのこともすっかり忘れはてた。さらに歳月がながれて、鳥が飛ぶことに飽きて巢にもどるように、いつのころかという確かなことはいえないけれども、たぶん五年くらいまえの秋のおわりころ、吾輩はふるさともどり、それからまた家をはなれ、九江にゆき、旅館にとまり、いつまでたっても汽船がやってこないのを待ちぼうけしていたとき、吾輩はひとりっきりで長江の岸辺にたたずんで、ひとびとが水のうえを往き来するのをながめていたのだが、それはまるでふるさとをはなれた旅

15 小窗より風触りて琴を鳴らす（小窗風触鳴琴）韋莊「清平樂」其二

16 之乎者也「四字都是古漢語的語助字。唐宋筆記小說裏常以之乎者也連用、指讀書人的本分」（『辞源』第三版）

人がふたたびもどってこられないことの予兆のようであり、どうしてかわからないが吾輩はものすごく寂寞のおもいとらわれ、長江をわたる男女の旅客のひとりひとりに親しみをおぼえ、かれらはひとりのこらずこの交易都市にやってきて商売にいそしむ吾輩のふるさとのおもいたちであって、長江はまさに天然の堀、あちらのほうに見える砂州はというと昨晚に吾輩が泊まった小池口なのである。吾輩のうちから九江まではというと、一日の道のりで、朝にたつて晩につくのだが、ご存じのとおり長江をすぐにわたることはできず、明日の朝日が東からのぼるまでまたねばならず、小池口で泊まる宿をさがすことになるのだが、ここは地図のうえではまだ梅山の地域である。秋になって日がながくなって、もう日がしずもうかというのに、吾輩がのろうとする船はすがたをあらわさず、水のうえに浮かんでいる最終の渡し船はせつせと客引きをしており、ところが客はさっぱりやってこず、吾輩は船頭になりかわって気が気ではなく、やるせなくて泣きたくなくなる」

「あんたはひとりきりだったの？　なんでだれかといっしょにでかけないの？」

「吾輩はこの渡し船にのりこみ、吾輩はどういうわけかのりこんでいて」

「ほらまたそんなこといっちゃって！　またもとにもどっちゃったんじゃない？」

「たしかに、なるほど帰るべく帆をあげているのはあきらかではあるが、ともあれ吾輩はのりこんでいて、なんともはや吾輩にはいべき言葉もなく、世のなかであってただあの舵をとっているものだけが吾輩のことをあわれにおもってくれているにちがいでなくて、かれはときおり吾輩のほうをちらちらみたりする。あのかの莫須有先生には冒険的な精神はこれっぽっちもなく、船にのって長江のまんなかをゆきながら、こちらをみるのはダメだし、あちらをみるのもダメで、もし神さまがこのとき高浪でもって吾輩のかわりに世界をおわりにしてくれたら、もし吾輩の手間をはぶいてケリをつけてくれたら、パパママと一声さげんでおしまいになって——The rest is silence」¹⁷

「なかなかいい話をしていたから、あたしはあんたのかわりにつらいおもいをしてあげようとおもっていたのに、あんたったらまたふざけちゃうんだから、笑っちゃうよ！」

家主の奥さんにご機嫌ななめになり、くちびるをとがらせるが、莫須有先生はちっとも意に介せず、面とむかっているのに目にもはいらないのである。こういうひとは隆福寺に講談を語りにはふさわしくなく、ややもすれば共感するところを売りはらってしまいかねず、おちょぼ口、かわいい纏足、いきなり裏切りものにくわわって、まったくもってそんなバカなことがあるものかと大声でわめく。

「ふん、あなたのご存じなろうが、吾輩は昨日ひとつの文章をものするにあたり、とある英国の言葉をひいたのだが、すこぶる sentimental なものであって、ひとはたとい百歳まで生きたとしても死ぬときには哀れなもんだというのだよ。このことは未来の考証家にゆだねるとして、話はもどるんだけど、長江に日はしずみ、漠漠とひろがる砂州、このうえなくうつしく、この好い子ときたら、ようやく郷土にたどりついたというのに、かえってとてつもない孤独にさいなまれることになり、日も暮れようというのにゆくべき道もゆきつまり、ひとりぼっちであたりをみまわしたり、ひとりぼっちでふらふらさまよったり、どうしようもなく落ちこんで涙をこぼすのである。吾輩はふたたび昨晚泊まった宿へともどってゆく。ところがまさか、ところがまさか……」

「ひょっとして一文無しだったんじゃないの？　いつだったかうちの旦那が滄州から逃げかえってきたとき、いっしょの仲間たちはみんなてんでんバラバラになってしまい、まったくの一文無しで、一晚中ずっと雨に降られつづけ、やっとのことで民家をみつけて泊めてもらったのよ。まったく旅人っていうのはかわいそうなものよね」

「まさかその晩にその宿のなかで魚のお姉さんとでくわすことになるうとはおもいもしなかった」

「こんなにながながと話してきたのもその娘さんのためだったの！」

「まあそう気をわるくしないで、あなたはどうも吾輩をしゃべられなくしてしまうが——ちゃんとした年寄りであれば恋愛がらみの話についても聴く耳をもってやるくらいの度量があってもよいのではなからうか？　ひとは母として子をそだてるという段になれば、子どもの恋愛がらみのことについて格別のとりはからいを工夫してなぐさめようとする。ところが吾輩はというと自分で自分をなぐさめるよりない。ポロっちい宿はぼちぼち灯りをともしころおいだが、旅人はいつもひとの気配をはばかりのものであって¹⁸、はいるにはいれず、でるにでられず、なにげなくのぞきこん

17 あとは沈黙。『ハムレット』のなかのセリフ。

18 客子は常に人を畏づ（客子常畏人）曹丕「雑詩」『文選』第二十九卷

でみたら、まさに灯りを消そうとしているところにいるのは魚のお姉さんではあるまいか？ 魚のお姉さんはもう起ちあがって吾輩のことをまねている。ああ、まったくもう、二十余年の歳月はかえりみるに一場の夢のようであり、この身はあるといってもこころおだやかではない¹⁹。青い灯りのもとで夜更けまで、これからのことを語りあえば、魚のお姉さんは杭州にいて文学を研究するのだという」

「姉と弟とのあいの場面はとてもおもしろいわ。いまどきの娘さんはみんな才能をもっているけど、そのひと髪をみじかくしているの？ 祝英台²⁰みたいなのも、べつにめずらしくないわよね」

「翌朝、長江の風と波とはすさまじく、われわれはあわててわたろうとしていたんだけど、ちょうど折りよく「公共の」渡し船がでるということで、われもわれもと船にのりたがり、英山や霍山、宿松や太湖、どこもみなゆきたがるひとで満員で、世間をわたりあるくひとびと、乞食しながら行脚する修行者、野菜や魚を売りあるくもの、みないっしょくたに船にのりこんでいる。魚のお姉さんは髪をととのえる余裕さえなく、吾輩のみるところひどく寒そうであり、さらに船酔いもするというので、腕を枕にして荷物にもたれかかって景色をつらそうにながめている。われわれははなればなれになった。それから再会したのが一昨年のもので、吾輩はちょうど天下になりひびく有名な庭園のあるところで避暑していたのだが、ヒマにまかせてひとりでぶらぶらと散歩していたところ、ある日、たしか記憶によれば上弦の月がでていたとおもうが、まさに日も暮れようかというころ、青空には眉のような月があって、吾輩はというと百尺ほどの古い塔からおりてきて荘嚴という二文字がしるしてある建てもものまえまできてみると、だだびろい土地にひろがるハスの花がまっすぐに咲きほこっており、それをどう瞥えればよいかということもわからぬまま、吾輩がただぼんやりとたたずんでいると、いきなりむかしなつかしい友だちに声をかけられ

——莫須有先生！

このときはもう莫須有先生とよばれていた時期とそんなにはなれていないから、たぶん莫須有先生とかいってもよいとおもう。そういうことではあるんだけど、ひとの身になってみると、莫須有先生としてもどうにもしようがない。莫須有先生はむきをかえて、その昔なじみの友だちと肩をならべ、手をつないであるき、野の草花、それをひとあしひとあしふみしめながら、たしかに魚のお姉さんなのである。もう世のなかのこ

とにビックリすることなんてとうになくなってはいたはずなのに、異郷にあって旧知のひとにであってみれば、莫須有先生はくりかえし旧交をあたためあい、まるで子どもみたいな顔になり、ほんとうに純真無垢になって、川面には飛びたつカモメが群れ²¹、舞いおちる花びらがただよう。

——あなたたちはいつここにきたの？

——ずいぶん何年もあわなかったけど、まさかここであなたにあえるとはおもわなかったわ！

魚のお姉さんは子どものようにくすくす笑う。祝福すべし！ かれらが吾輩にうちにこないかとさそうので、よいとも吾輩はこたえ、さっそく酒をのみたいとおもったのだけれども、だれも吾輩に酒をすすめてくれなくて、だれが酒をのませてくれないかなあと吾輩はおねだりする。そうしましょうと魚のお姉さんはいい、昨日あるひとからおいしい葡萄酒を二本もらったところなのよという。ここからさきの話はなるべく簡潔にのべるべきだろうから、ひとまず酒をのむという話だけをあなたに伝えておこう。二杯ものもうもんなら吾輩は酔ってしまい、酔ってしまえば吾輩はなんにもしゃべらなくなる。魚のお姉さんはまだ大志をいっていたころの吾輩の幼名でもってしきりによびかけ、吾輩はそれをとうに忘れていたのだが、とりあえず返事がわりにうなづいておく。むかしなつかしい友だちは吾輩のことを古典的な二文字でよびかけてくるが、とりあえず口であらわしておこう。

——ねえ口くん、まさかあたしの同郷のひとが飛んできてくれるなんておもってもみななかったから、今日はあたしのかわりにたくさんのでちようだいね。

——今日はぼくもとても誇りにおもっていて、だって莫須有先生がぼくたちの家に来てくれるなんてすばらしく意義のあることじゃないか！ ぼくも十年ぶりに友だちにあえたわけだけれども、いまやただぼくたちの友だちというだけじゃないわけで、なんといったらよいかわからないんだけど、魚ちゃん、きみたち梅山の風土や人物についてちょっと語ってくれないか。

——莫須有先生がもう名前を忘れちゃったひと、あなたがよろこんでくれるなら魚のお姉さんは聴きたいことをなんでも話してあげるわ——たったこれだけのん

19 二十余年は一夢の如く、此の身在ると雖も驚くに堪う（驚二十余年如一夢、此身雖在堪驚）「臨江仙」・夜登小閣憶洛中舊游

20 第九章にもでていたが、男装の麗人・祝英台と梁山伯との逸事をふまえる。

21 飛び起てる沙鷗の一片（飛起沙鷗一片）張孝祥「西江月」

だくらいでもうダメになっちゃうなんて、魚のお姉さんがすすめるこの杯を、のまないなんてゆるさないからね!

——ぼくの知るかぎりかれはそんなに酒がのめないはずだから、あまりすすめないほうがよいとおもう。

——ほらほら、あたしだってお酒はのめないのに、こうしてつきあってあげてるのよ。

——吾輩はあんまりのみすぎるとおもしろいこともいえなくなってしまって、まるっきり朦朧としてしまうんだけど、今宵はたしかに友だちとおもう存分おしゃべりすべきだろうから、どうか吾輩がこころのなかでどんなにうれしいとおもっているか察しておくれ。

——あとでふたりを映画にさそいたいんだけど——莫須有先生がもう名前を忘れちゃったひと、つきあうわよね?

——きみたちがそうしたいというなら、ぼくはよろこんでつきあうよ。

□くんは笑いながら魚のお姉さんにむかっている

——あなたはかれがゆくはずないとわかっていてわざといているね。

——来世にあつてあたしがもし男に生まれたら、あたしはあなたたちとツルんだりはしないとおもうわ——たぶんあたしは太った女のひとをさがして、それも纏足の、そのひとと一日中いっしょに遊ぶわ。

——きみはまた無茶なことをいっているね。

——莫須有先生がもう名前を忘れちゃったひと、あなたはそうおもうでしょ?

——そうだね。

——To be or not to bi ,that is out of the question.

魚のお姉さんはほとんど椅子からズリおちそうになったが、すぐさま態勢をたてなおして椅子にすわりなおす。

——魚子はもう酔っぱらったね。

——ひとが結婚するとダメになっちゃうのは、結婚したとたん奥さんのことだけしか目にはいらなくなるからよ。

——あもう、魚のお姉さん、吾輩はいよいよ頭がくらくらしてきた。

——ナシをお食べなさいな——あたしが皮をむいてあげるわ。

——□くん、魚のお姉さんはいつも華やかで品がよいんだね。

——あなたたちはもうすっかりオトナだから、あなたたちに魚のお姉さんといわれるのはほんとうに恥ずかしいわ——さあ、ナシよ、ほら!

魚のお姉さんが吾輩のためにナシをむいてくれるなんて、吾輩はほんとうにビックリしてしまい、灯りがやけにキラキラとかがやくようで、ものすごく頭がくらくらする。まるっきり朦朧としてはいたのだが、魚のお姉さんは吾輩のことをじっくりとみつめているようである。ありとあらゆる出来事がみな逆さまになったようで、魚のお姉さんはトラのようなまなざしで吾輩のことをみつめており、このトラは子どもをゲームにさそおうとしているようである。

どうしてなのかわからないが吾輩は□くんのソファのうえでしばらく眠ってしまったらしく、吾輩は目をさましたのだが、酔ったあとで目をさますという感じはめったに味わうことがなくて、なんにも苦勞しなくて世界はこういう感じであるわけで、あきらかに現在はこうして存在しているのに、あきらかに過去もまた存在しており、あきらかに未来はまだ存在していないのである。そのときの情景はありありと目に浮かんでくる。

——魚のお姉さん、どうして□くんはいないの?

——応接間でお客さんの相手をしているわ。

魚のお姉さんはそこで縫いものをしていた。

——ちょっと眠ったら酔いもさめたでしょう。

——吾輩はまったくダメだなあ、ちょっと酒をのんだくらいで酔っぱらってしまうんだから。

——あなたはもうずいぶんながいこと梅山には帰っていないみたいだけど、あなたのおばさんがどんなふうだか知ってる? ずいぶん暮らしに困っているみたいよ。

歯で糸をきると、裁縫道具をそっとしまう。

——魚のお姉さんは縫いものもできるんだね。

——いまごろわかったの? そのうち魚のお姉さんはあなたのために靴をつくってあげたり、きれいな花で刺繍された枕もつくってあげたり、でもってそれを誕生日のプレゼントにするのって、どう?

——からかわないでください。

——からかうだなんて、だれもからかってなんかいないわよ。

——ひとりで眠るっていうのはじつにおもしろくて、この自分が存在するっていうことも忘れてしまつては、この自分のほかのものを大事にすることもできなくなり²²、さっきもそうだったように眠く

22 覚えず 我有るを知るを 安んぞ知らん 物をば貴しと為すを (不覚知有我 安知物為貴) 陶淵明「飲酒」其十四

なったらすぐに眠りこけてしまって、あなたたちが吾輩についてなにかいっていったって気づきもしなかったんだ。

——あたしたちはあなたについてなんにもいってなくて、あたしはひとりでここでずっと縫いものをしていたわ。

——魚のお姉さん、吾輩はいま貞節という二文字の意味がようやく腑に落ちたんだけど、おかげでこれからの人生をどうにかこうにかやってゆけそうで、これからちゃんと生きてゆけそうだ。

——あたしがおもうにあなたはまえよりずっと賢くなっているし、まえはちょっとだけおバカなところもあって、というのになにかにつけてマジメすぎてどうしようもなかったのよ、じっさいのところ。

——あなたはなにもかもわかっているような口ぶりだけど、じっさいのところ——

——なんだっていうの？ あたしに突っかかってくる気なの？ いいたいことがあるならおっしゃいなさい。

——吾輩はいま忽然としておもいだしたんだが——肝臓と胆嚢とのあいだにも楚と越とのあいだくらいのちがいがあんだよ²³。ある絵画には The Expulsion from Eden という題がついていたじゃない？ 吾輩はみずからその画題でひとつ絵をかいてみたいとお

もっているんだけど——吾輩のおもっている意味はまるっきりちがうんだけどね。

吾輩はいまごろになって気づいたのだが吾輩の頭のうへの天井板の白さはすこぶるあやしい色合いであつて、みればみるほど「白」にはみえないのである。

——お茶でものむ？

——もう遅くなったから、そろそろおいとま——

そういいかけて、莫須有先生はふらふらと横たわつてしまう。どうしちゃった、ながながとしゃべりつけてきたっていうのに、この期におよんでしゃべり惜しみするというのかい？ 眠いの？ これからは、よほどやむをえないのでないかぎり、おしゃべりはつつしんで、苦しいことは自分で苦しみ、楽しいことも自分で楽しんで、ケチといわれたらケチでよいし、贅沢といわれてもこれ以上の贅沢はなく、あなたたちはぼくに見識がないなどとおもってはいけなくて、ほらご覧なさい、これって雲や霧にのっかって大海原でトンボ返りするようなものであって、そんなことできる？ いきなり頭をもたげてみれば、家主の奥さんはどこにいっちゃったの？ どうしてうちのなかにはいってしまったのだろうか、さっきまでしゃべっていたのは、あなたとしゃべっていたのか、それともしゃべっているという夢をみていたの？ まいったなあ、明日の朝になったらきっと一言もおぼえていないぞ

(2021. 1. 20 受理)

23 其の異なる者より之を視れば、肝胆も楚越なり（自其異者視之、肝胆楚越也）『莊子』徳充符